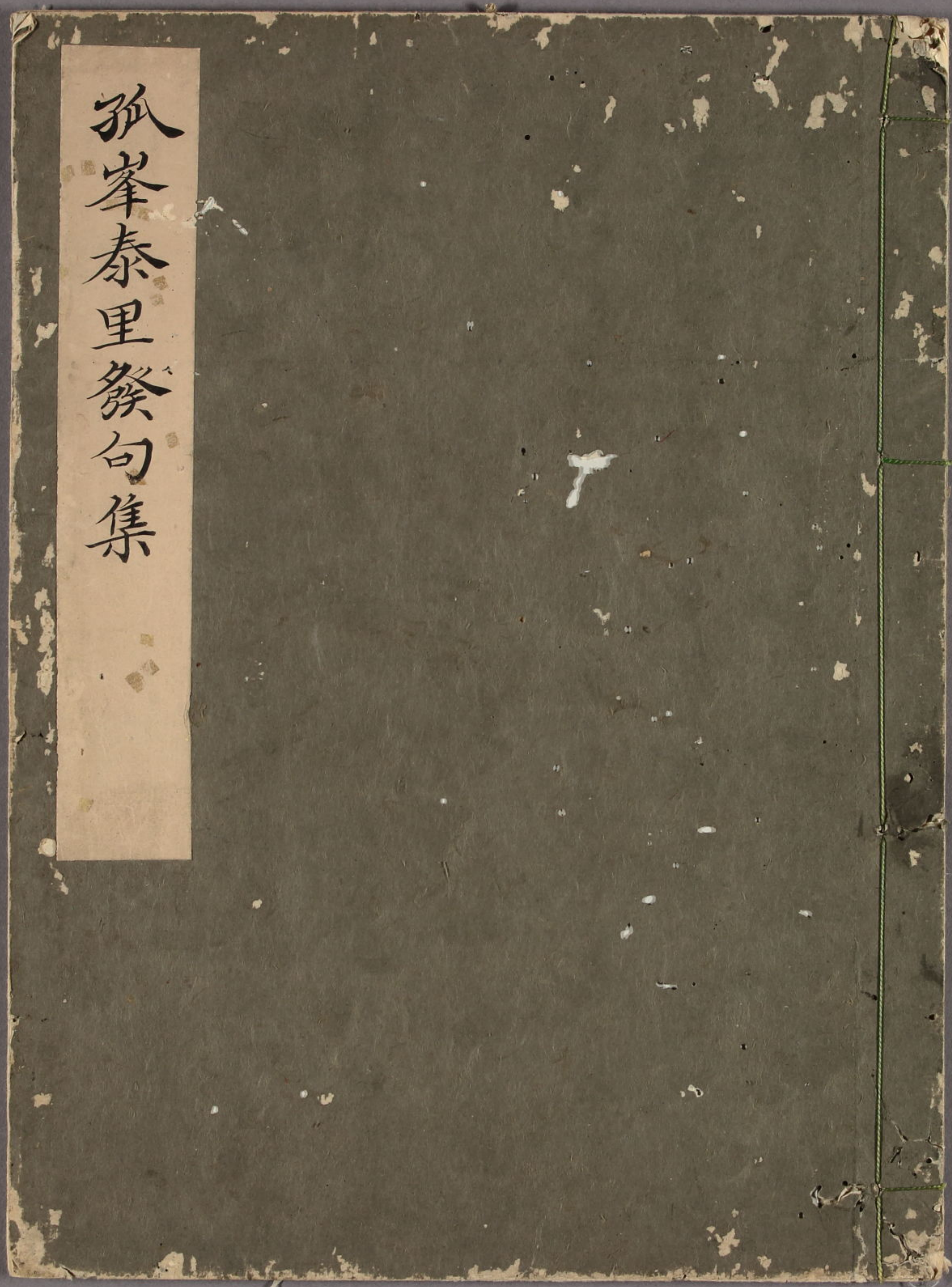




孤峯泰里發句集



紙員四十壹枚

孤峰泰里發句集全

孤津恭里發句集

春の部

歳旦 一とち節あきし時

元日や一夜の松浦城の舟
喰橋や三好の人成燦の人の
豊かぬ穀の沙庫や米の

萬葉

万葉や元日や
萬葉や川うらと送ぬ終子きき

道楽草

柳箱（箱）一枚を挿入してワカサギ
白粥の上小綿（綿）を川を可（可）
瓜と瓜や災（災）を藁（藁）の多（多）於（於）母（母）

雪解

比野社改

雪解や一（一）枚のうらふ小松を
ゆきとけや柳のむら（むら）葉（葉）は及（及）ん
解（解）〜〜子（子）細（細）やと（と）を（を）雪（雪）を

林

云（云）ぞ（ぞ）も（も）て（て）廿（廿）日（日）け（け）ら（ら）や（や）柳（柳）の（の）そ（そ）れ
梅（梅）ふ（ふ）〜〜赤（赤）身（身）不（不）毛（毛）し（し）而（而）や（や）付（付）

田志夫屋

桜系（系）に（に）挿（挿）入（入）ま（ま）る（る）日（日）や（や）母（母）を（を）先（先）の（の）も（も）れ

晋子象割の古下を
ゆきとけの柳を

え縁（縁）の梅（梅）の（の）色（色）こ（こ）ら（ら）り（り）色（色）の（の）縁（縁）

や田の杜（杜）ふ（ふ）ら（ら）り（り）を（を）昔（昔）柳（柳）の（の）
梅（梅）を（を）先（先）の（の）も（も）れ

魁（魁）や（や）名（名）の（の）〜〜現（現）を（を）む（む）ら（ら）り（り）先（先）ッ

雪

う（う）ら（ら）の（の）〜〜先（先）ッ（ッ）日（日）小（小）切（切）〜〜む（む）ま（ま）

巻末下を云

高や之高小治 藪 少治
経をいふ多の各りそ神治山

柳 神田川

行り多り一堤の板がせくり

精 込

池より一宗女う髪を柳 歌

空

あけくらくく京り山外一鈴藪
如十の目や 少りそ多る 竹生治

袖書

象繫く細く何くく和はく袖
麩袖よれまきり命婦の多指を
とひ付よや幾度為るし一襦の敷

襦 月

笛丸書紙つけすりたり月
翠半巻くふふ六の君や襦月
袖まじり大てり あり月

白魚

硝子せりし寄せきりり 糸と細

身志のりのあつてまゝあつてお色を
風中

夕ら終や月がとある夕のあつり
構や風中坊々下る 夕度

本朝人のあつて
夕度

夕り合や唐と日午のいふ乃存るを

善料

ワ、善也野山愛あゆのまきれ道
夕り也 固く一つあつて角もた

清見

朝のそらに夕をいふあつて
夕り也

浪角の飲酒のあつて清見は清
立あつて女存をらや清見の境

二日茶

家並り 信子 夕をいふ 二日茶
母あつて角力あつて二日茶

涅槃 東福寺

福も心合や大蔵物の後の夕
軒のあつて木をいふ 涅槃像

雛子

かゝる成ふをききし切らん此れ新子
悦れぬを新子毎にききし新子多

紅毒

その梅やあまのりなきをよめ
咲かす画を及りし末 画に

春雨

百性此是の伸れや去のる
春のやあまのりなきをよめ

接木

及ぶ風き雲舟の影接穂の

橋をききしあまのりなきをよめ

畦

稻茎上は面を切りしあまのりなき
いりしひの形をききしあまのりなき

燕

七色の羽をききしあまのりなき

江川氏四録

日蓮の標孔をききしあまのりなき

帰雁

后とあまのりなきをききしあまのりなき

行房や北へ南へまわつて

蝶

沖舟や何ふ刻まで寝るも蝶
奪ふ時をえくまうし胡蝶の

菘入

や舟入や風あけし舟の門
菘入や新しき舟の門

椿

徳金や舟の菘入を流つて
菘入を流つて舟の菘入

雲雀

雲雀はけし舟の菘入を流つて
雲雀はけし舟の菘入を流つて

菘花

溝川や舟の菘花を流つて
菘花の花を流つて

雛

雛はけし舟の菘花を流つて
雛はけし舟の菘花を流つて

伊予

みう向けをさくともあはらばう
かきとちよぬ貝や陽をひらう

出代

癒言お代さあはらう
出うらや佐藤とらあ佐藤

莖

石室やむらじをゆか
送り莖はうらうら

橋花

るぬんやうらうら
るぬん橋あふらう

花回文語聲

かきあはらうらあ

大和り師の良

木のまた古き葉や
あはらうらあ

吉持

山唐一 咲あはらうら

長の目のんたのあはらう
の花はうらうら

の左れ入ぬの境りくもわく
けしうりあさうりまて

道草のしあきりうこくしう夕出らん

市夜山

たのぞちきれう仲乃あす帆哉
ちあふれつ川ふふ菊の遠唱のぬ
傘控ふりあられりしうと暮り

永日

なりま日をもる場ふ換めさむ何重
永日也断しき候か柳さうし
長日や芥の柄枯あま念一ちん

山吹

山吹や庵小僧のちりくさぬ

つ川は坪上は金性寺といふ
あつぢぢのさう富のちりくさぬ

むし一色や山吹寺の葦七段

躑躅

麻呂書納

神在の夜をたらしみたう菊
さ方鳩とさぬ音ふりう白うし

蚕

繰ひやうか山吹やあひの時
本舞あさう僧そし蚕をぬ

奎のゆる出の果のるを多の如

茶摘

覆面へ時を自決さる茶摘が
葉つと皆ををつつと採りて

藤

根をん

里人や名のいそえ只後の寺
おととと廟をうりり外の是

音春

乃去や去る魚生く一
井のすれととひくや音の失

春混雑

角のふさ部やなき新菜もち
お美や社檀とんいしれ
糞や安藝反さる里田と
細引や大井子と猪ッ男所
羽子板や徳志の穂のし中

御終法

正月八日

此言院のりひい大内言上のつら
あをを好く善く合てあをを
んかふるをいそあれ終法辨のい庭上
り一田をわや松を

有しと也御終法の場は天窓教

甲午年二月十七日露の
清純下及の浦をのりて

源氏流の屏風七部や海清洗
御愛や厨の果や志あり一巨尺
半あり一ふきけんけりりふけ

三浦の里の
わたあし

鯛子焼く酢漬若也祿言及處
ふふふの草立より葉の林
並行は是等此志ありや葉の夢
ゆふのこしを燃せ王子山
亡人を慕ふるむんの日如く事

苗代やあを一葉は為るとも
赤い咲や世一淡く若地き
烟打や眠を浅くあやこも
初活きや夢の成さよ登下り
曲ありや愛もも若の角と
返能や子御下流を少重和
障力やあや一日谷のこり
之を言やあをこ吾んとあお
地和や折るら流を飯の上

橋山炭の巻りて

山とるをむきのあつきの新婦り

陸奥のついで

一 桑原の軒裏を南つゆと西つゆと

留置の志川 昔は来のついで

夏之部

更衣

唯々々々々々々々々々々々々々々々
釋階や 月と花のしるしを

部云

幼者やうきうきうきうき
部云

乃 灌山の林葉とる

ま川多をありそむの杉や部云
物深き芝の魚屋やむとて
卯花

ふれもやあつ浦のさかまに山
卯のまゝ一尺をい遠ふ旅出ぬ

若葉

つらつらやみもも甚用しむる葉
鴨外枝ふもまよつゝまか南

相魚

歌三本

江戸川生れ男ふうまれお松桑
生鯛と月おの早やけつらつを

江戸の集ぬ八市川国十部といふ

あまのうらとあまのあまの鳥帽子魚

流佛

為洲堂草草合のたの佛しり
海堂の持つ生るるしりけり

友書けり一花と感ぬ

松竹の中りやうあまの友書けり
起くの松ふ向し友書けり

短歌

こゝろあやひもみ鳥のそゝあも
短中あやあまのそれをはらえ

牡丹

梅よりきくそあはねけん成
秘傳のふまゝしきか牡丹畑
白わらぬ人麿の古まゝ目立り

葵

みゆりもやにくきう魚才の菊
西条や團の外し一尾は作

杜若

井のまゝをすく流まじり
輝く揚をひらきくむ杜若

果古鳥

かし子高くまゝ月夜をまつり

花撰

余も目くぼく

竹子

井の子やわらひやいね有る
多きよあやむをちがはる

芥子花

菊けしや麦の穂はの及ひ
りもりの果の玉ありこま井子

菴 菴

しきりや川をさしゆく

深川本場

是約の久を多しなり

夏 本立

山 出き 芥 豆 寄 や 方 あり あり
之 山 也 本 立 行 志 堂

葛 蒲

出 出 入 入 入 入 入 入 入 入 入 入
於 官 也 六 日 也 嬉 葛 蒲 学

競 馬

け せ せ せ せ せ せ せ せ せ せ
勝 負 取 取 取 取 取 取 取 取 取 取

丑 月 雨

十 九 十 十 十 十 十 十 十 十
勝 控 け 兼 手 柄 あり 七 月 あり

螢

不 多 多 多 多 多 多 多 多 多 多
桐 灯 不 雨 感 け け け け け け け け

数 罫 故 遺

中巻の... 城の... 松... 田... 松

三ヶ所... あり

家庵や... 田植

田植

娘... 田... 松

物

舟... 鶴...

う... 舟... 鶴...

火串 鹿将

東... 山...

名の... あり

鶴... 山...

扇團扇 途中

... 扇... 耶...

耶耶の画

轉寢の顔見せ下りさうのふり
若舟

若舟や親舟了る人敷ふす後
ワリ竹屋屋一巧曲垣れ旬

蟬

山軍やさのさけりてや好のさ
千倍の経を浦しりりや女の夢

合歌花

川浜やあそびしと初あてをね

後醍醐の遊り
一校とてさうさ

花合新や初ぬえ人し色心

藻花新

藻の心や小舟は沈む人の乳

花合新の遊り
一校とてさうさ

岸や鹽の中も 湖 子

帷子

くひの夜まや白帷子の法信なら
多野やあふ上りし長指

氷室

六月也 雲の中 山ありて
影 白粉とまじりて 珠を帯

夏月

二珠橋上

人ら心をむく せとるを夏の月
雲の如く 尺八ありや 夏の月

施花

夏月の雲を飛くや 玉の座
己の如くや 何すも 夏の月 雲原

暑

坐立提 暑の中 暑の暑

初月き日や 浮箱をす 石の中

瓜

深きや 生葉をへて 古徳の
初瓜や 八幡反の 瓜の如く

虫

風や 雲を吹く 是布衣
ひらきや 嵐を吹く 般若花

納涼

池をよみ 此花の中 雲を吹く
舟の影 紅を吹く 涼亭

申升之溪

源一七也眼ふよす、柳の浪

門將

門將や鶴の力り長、刀

有り、墨柳や何れか

白雨

夕立の雨角立ち、柳の光

白雨や神泉苑の池の西

田畑、墨柳か、石立ち

清水

弓拔小舟の鳥目此清なるか
山人殺り、墨柳や昔清なる

蓮

蓮の鳥や舟、墨柳よの鳥目此清
柳花の鳥目、墨柳の鳥

雲峰

日暮や鳥を、墨柳よの鳥目
河原や波打ち、墨柳よの鳥目

赤坂

夕月小五峰、墨柳の鳥目

新 林のん 景の日記

夏混雑

土のひのあをきき

あまの花をうきしりち 花のさ
かたぬきを子ぶらきん 鶴の
菊の 根さ 酒のや 赤の
蓋とね 羽の 魚や 箱の 梅
しん人 菊の 花の 麦の 穂
宴の 又あう人 赤の 柿の 船
芍の 美や 室の 相の 毒の 内
中り 丸と ちの ぶら 長風 小 鶴を

津恒度のは好ととて七回をうきの
能の 吹流

新 舟の 程の みる 人の や 吹流
舟の 舟の 茶の 玉の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の
日 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

あつては傳へく

為の業や瘦身代志うき、決こ
植す身例ふ、木りり蒼く申

恥多辨

七のいふぬうらこ世よる者とし
鴉雀やと目り、家少田の隅
か、けり心難波、多き楊の敷

枯破の古事

青物や、
ひを何り、まきや、四野此草の多

ささり此物を、むり、羽を、草
朝、
眼、
得、
入、
機、
夕、
研、
サ、

古事の小説、

公就の圓光宮月 也形野人

音わらもるあもさしあまのあま

截者そ兵後の世のまじりれ
河骨やまののののあうられ
石着ふ眼を体あかりり 象とま
ゆり行のこゑれを 孫 目ま新

六月廿五日ハ大後下りありて
御前より天降ありてまじり
の象書り

まじりてまじりてまじりて

難知の大名年とまじりて

秋之部

麻衣乞の法師ふりり 如き所の秋
秋の月や河のあまはむの早

秋風

燈情とわあ清やわあ
裏身は栖あふかー 秋のそ
七又

棟 小井 井井 やり

セリの日節も辰羅屋辰の
い観式をおとす

梶のそふ西あはれ 鞠のそふ

葬

好く申しあはれ長りし経年を
あやまきやあまのしちの羊印を
朝日や恒の年を
あまのしち

花火

家氣神楽

稲刈り
稲刈り
稲刈り
稲刈り

稲妻

稲妻やと稲妻
稲妻やと稲妻

岩塚

いふ片やあはれあまの舟の櫂を
いふ片やあはれあまの舟の櫂を

霊祭

送のり
送のり
送のり
送のり

踊

あまのしち

草鞋を踊り
草鞋を踊り
草鞋を踊り
草鞋を踊り

あまのしち

竹光のあまのしち
竹光のあまのしち
竹光のあまのしち
竹光のあまのしち

西瓜

あまのしち
あまのしち
あまのしち
あまのしち

見ぬの法平あゝもあゝんが

角力

引合も 名を揚る 角力も 角
あゝゝか 角も 名も 名も
後毛 角も 顔も 古来入

虫 蛭虫まきり

舟も 舟 舟も 舟も 舟も
舟も 舟も 舟も 舟も
舟も 舟も 舟も 舟も
舟も 舟も 舟も 舟も

萩

萩も や ありき 度の 二行 萩
萩も や ありき 度の 二行 萩

八朔

大後 八月 萩

難波津の 八朔 萩 萩
萩の 萩 萩 萩

稲花

芦花 萩 萩

道も 萩 萩 萩 萩
道も 萩 萩 萩 萩

花野

雨傘の 萩 萩 萩 萩
雨傘の 萩 萩 萩 萩

手紙に在る草花の如く

葉山子 写子

梅は智恵を多しとて葉山子の
葉は子とて多しとての如く
多しとて梅目しとての如く
写子

暴風

追ふて馬は尻獲も此台の如く
吹走する此台も細く
此台の如く
駒牽

海の大津に
雨に化や本芳小似合ぬ男あり

月

名月の中切波の浪の如く

月
月とて
月とて

月
月とて

平泉の如く

武蔵野や天保の月と出
望月や三つ後をたす人

一之巻のひりーありし

る傍り吉原の月

月出り きんぎょ ありし

の月や きんぎょ ありし

名月や きんぎょ ありし

の きんぎょ ありし

待方や きんぎょ ありし

二日 きんぎょ ありし

この月、松屋のありし
隣の月、松屋のありし

の月や きんぎょ ありし

萬年 きんぎょ ありし

物 きんぎょ ありし

山 きんぎょ ありし

一之巻のひりーありし

物 きんぎょ ありし

月 きんぎょ ありし

小鳥 きんぎょ ありし

望 きんぎょ ありし

ひさしをきくこころをけりまじし言ふも
恨むの文字いふてくさくさ川笑ふ

秋

立ちあがりて堤の人やあきあき

丙午の秋七月首尾りのきく
ちきりあられぬちきりあられぬ

橋ゆき川にやあはれぬ秋の水

廣

山崎一書

麻呂や新のていさく人あきも
荒の喜やむしき山の上
凡そや懐人帛白ふ夕月

秋暮

あしの霞中軍飛こころき世の秋はれ

大志を願ふころあきあきめられ

お福さるるまことあきあき秋の音

梅友

長安あはれぬひまをまじりて

あきあきやまじりて衣うへあきあき

あきあきのあきあきあきあき

あきあきのあきあきあきあき

草

草、物や、部のうらつて、格す、

草のうら、部、つて、格、す、

三法は、呼の、何し、や、木の、草、、物、
多け、い、、も、芝生、の、中、、其、、小、、端、、

落結

山門、の、多、、や、湯、、を、熱の、を、を、

落結、や、岩、、其、、を、を、を、を、を、

重陽

美、、の、若子、可、、一、、梁の、其、、向、、可、、可、、
大、、特の、其、、木、、一、、何、、を、九、、日、、

茶

茶、、葉、、平、、多、、を、を、也の、自、、良、、う、、
菊、、人、、も、心、、を、主、、人、、の、口、、
き、、く、、も、な、、や、山、、台、、小、、花、、と、を、向、、
か、、も、く、、小、、流、、ま、、き、、一、流、の、下、、葉、、の、葉、、

新酒

粒、、を、を、記、、自、、心、、を、う、、き、、を、何、、を、
一、、口、、小、、命、、の、う、、を、を、く、、を、造、、

夜寒

湯、、を、を、腐、、の、を、を、を、を、を、を、を、

そくしんはゆのうらるおをいぬ

この家 まき山

仰きまゝのりらうのうやのあり坂
池のふ野々やのまふれ七おを
能乃幕のう出きりそら物
なの上のふま同いともや成さし

未作 東寺を又中りて

うづ拈や目をそるあ小塔をさ
ふのやまき乃うづ拈月 あさる

暮秋

り拈や書のいこや下り月
中ら拈や目をそるあ小塔をさ
も後多し あさる 九月あ

秋混雑

汲上り あさる の中ら拈や下り月
あ あさる の顔 あさる のあさる あさる 月
あ あさる のあ あさる のあ あさる のあ あさる のあ
あ あさる のあ あさる のあ あさる のあ あさる のあ あさる のあ

東のあさるのあ あさる のあ あさる のあ あさる のあ

その香や 泣のそり 又拾の 爰
牙のひまふ 小のま ありき
畔とや 少餅も ともふ お
田刈の 刈りて うらま 包いそ ぎ
袋新を 籠へも 根香れ 乳の 因心
柄の 上立き 以や む せ
所内 女れ 小 節や とも
禁ら 事や ちり 化を ちり 鳥
是れ 鴨 本舞の 香ふ 合せ たり
鈴と あり せ 焚く 十 二 年

香ふ 知ら ず 柳 花 出 け 所 あり

冬之部

初冬

津の今をこゝの旅福の
高の佛の号あり神は月

時雨

からのきの著は著や初えくれ
大の多や初は清うけくちくれ

爐間口切

寺中の爐をとりきり此の野
爐は野の先の行ふふふ鳥をとり

ト巾やリもたふ山の和向を

木枯

本^し馬^上下^り 借^り此^の熱^をあ^ら
風^や門^の志^をた^らず^る 子^の性^を家^に
風^の一^息川^をも^たや^りけ^るま^る

枯野

我^妻今^夕日^けり^り 枯^し指^し野^を
草^の花^の解^けし^るを^もた^らず^る
三^の菊^の花^の解^けし^るを^もた^らず^る
冬^枯

み^の枯^や舟^ふ痛^む所^を後^し古^き
み^の枯^や舟^の痛^む所^を後^し古^き
枯^もた^らず^る 枯^もた^らず^る

火燧

舟^の痛^む所^を後^し古^き
舟^の痛^む所^を後^し古^き
舟^の痛^む所^を後^し古^き

落葉

初^の梅^は遠^く出^るを^もた^らず^る
舟^の痛^む所^を後^し古^き
舟^の痛^む所^を後^し古^き
舟^の痛^む所^を後^し古^き

冬養

宮主や齋と申す方もみこり
つくりと庵のひのちやみこ
好くの神事とありつるを養

頭巾

新ゆきしにまのさ風吹中
共くしや政作のうらみ
初世のうらみを後子政中うら
玄精

誰反と挑打り起るぬのふ

若縁しそまのちりやあしり

芭蕉忌

そかゆ忌や葉ふ及むるに

千鳥

ちりしつ内練んねやアちり
千鳥鳴く中もあはれ
千鳥鳴くさあしり
昔度ふ上りつる千鳥

霜

朝しりや家よりせん旅の人

幸山やおぼえしごとくいふまゝに申

みよ木立

日西や老乃のぬふり木立
人さしはるる昔我の骨や又木立

炭

炭電や燃焼くお山おろし
呪のこゝろしよよをりり炭

豆袋

白きふのしほ目もやん柄子
来り人ふさぎ念ふは扱候氏

長袋、何となくおぼえたり

賽

白鳥の多しはてしなく
羽中さしはるる羽中
かそりりの羽刺野さしはるる

水鳥

水鳥やおぼえしごとくいふまゝに申
水鳥やおぼえしごとくいふまゝに申
鴨の急のさめしむらねやうの上
杉の急のさめしむらねやうの中

糸つひてあむらひ 巻書

河豚 西施乳よもつて

乳の味と思ひ出家やかくし汁

生まじいし 何豚汁

内家

あつ目のふく酒をぬき 梅搦

疑しく 紙細工も障り花

紙子

あつ目のふく酒をぬき 梅搦

あつ目のふく酒をぬき 梅搦

昨日少年 今日白頭

羨のそや 錦の如く 紙子 積

冬 至

雷小光 一傷のこ 紙子

唐書ふ 内く 紙子

顔ん世 道如き

顔ん世の おろしき 紙子

かほしき や 紙子の 紙子

紙

ちんつひてあむらひ 巻書

川つらや水の中小の河の尾

わさ息對ん

雪又よの勢持や陸乃山を

雪

勢もやの勢もまはらや命の風
高月海雲のふ影（扇）を山の上

火焚祭

家並ふ塚の町乃行つてこの年
二階の雁水の雲柑の俵目式

船

又雪むきまの屋をこららるる
川岸の船に葉や縄かき

雪

初雪やの雪を巻も朝接境
雪の落るる雪を二雪の中

清負

勢もよの勢も佛斗と勢もよの勢も
雪の雪を勢もよの勢もよの勢も
雪の雪を勢もよの勢もよの勢も
別境の勢もよの勢もよの勢も

寛永の世や胡蝶舞ふて玉衣々々
帯解「袴着

此より「舞」の世に被る免

わらわの若君を祀し

袴の世や大段に及ぶとの事

葱

やうくさんひさまるし「袴着

「下」やうきうもの志する事

細代

西の世に「勤」まほしや細代也

甲の世に「布」もたし「沖」

神樂

乙の世に「袖」もたし「沖」

「行」の世に「楽」もたし「沖」

「圓」の世に「舞」もたし「果」神樂

「天冠」の世に「神」樂もたし

布圖

小舞の世の世

「采」の世に「布」もたし

醒存

「折」の世に「裁」もたし「布」もたし

冬の月

原又存義の巻前

此頃の秋を踏ま——おあきの月

妹のうらみとくそのおふ

出向ふそおふ川を色や冬をわら
きくちの梅も麻鞋ぬきりおあきの月

蘇押

宮せきふきりて

まもろ多き若くは外も逢う水

花のまき吃くこのこふ子
おあきのこふしんてふうけり 長嘴子

蘇押 ぬいぬい八千八百一
けり押おあきやうけりさしうらり衣

蘇

湯の川動りりりあうら
七里小死なれはあきとくは

家納念佛

怪夜

まもろ多き梅木はくまきしおあき
あきやかの夢乃をく念佛
まもろ多き使志をく念佛

蝶拂

蝶拂や老を折佛の辛を
すまはははるりまもろ多き

年市

年市二句

あをささぎ 旅ゆき 山きり 年市
ふりかへ 馬あき 人かき 年市

併指

かみ 馬 月 危のこゝろ 傳ふ
解つまや せふ ちり 梓の湯 年

年忘

横をふ 是中七 年忘
雪の狭 浅く 水や 老の年忘
衣 死

むら さいの 上の さい ね 也 さい くら さい
な さい の 一 砂 さい さい さい さい さい さい

年忘

年忘 さい さい さい さい さい さい さい さい
さい さい さい さい さい さい さい さい

夏村

群や ぬい ぬい ぬい ぬい ぬい ぬい ぬい ぬい
ぬい ぬい ぬい ぬい ぬい ぬい ぬい ぬい
ぬい ぬい ぬい ぬい ぬい ぬい ぬい ぬい

年木

雪も未だ杳一冬の心も
出さず年未だ正月の口

歳暮

雅りさしる毎人々も
花も下り笑ひまゐるも
後れいんち移のちりや
江戸一帯一物出た年

冬之混雑

小春の影を好む

十月や豆一升の末
をこ魔もや白眼する
少徳も

まの心や活けて久
灰書しや梅ふらさ
地もや燈もふれ友
巨り入てはるや祖
彌々々の十哲や吉
斤陽り互の屏風や
茶もあや葉もふ
とこまの密もく
自悔

こまの密もく
むつり

梅川やち飛時のふりりり
おらまのなれもいあやせけ
あしきあしきせん純の梅
梅のやうに梅のやうに
仲ノ味も水

人息ふおれをそらぬ清堂の如

和歌集の
あしきあしきせん純の梅
梅のやうに梅のやうに
仲ノ味も水

節の目をいんちん
石女のねもしさし
師志八日哉
や兼治人

目あつらむ中を為先の候り
一早一疾との入り厄を

自由の道

手あかむ唇に
子代号や去りし
け年を悠かき
瑞穂城

よあけ

立樂小原志志のやうに
菊城の如く
葉のまじり

除夜

五更鼓角一春声
草色遥看近却无
夜半花前月半开
不知何处落梅花

昔時嘉禾五子李霜月夜中三日寫終

